

計算基礎科学コンソーシアム 第一回シンポジウム開催



開会挨拶で計算基礎科学コンソーシアムへの期待をのべる筑波大学岩崎洋一学長。

セッションコンファレンスにおいて、研究者や企業、一般からの参加者120名あまりを集めて開催されました。

超ミクロな素粒子・原子核の世界から、原子・分子をへて物質・生命、さらには宇宙にいたる自然界のあらゆる階層において、その基礎法則を見つけ出し、基礎法則から自然を理解しようする基礎科学は、すべての科学技術の根幹をなすものです。数多くの構成要素が織りなす自然界のほとんどの現象は、紙と鉛筆で、と形容される伝統的な理論的手法では到底計算することはできません。近年の計算機の高高速化に助けられた計算科学の手法は、基礎科学においてもますますその重要性を増しています。



来賓挨拶：文部科学省研究振興局情報課・情報科学技術研究企画官・スーパーコンピュータ整備推進室長の関根仁博氏。



発起人代表の筑波大学宇川博学長特別補佐が、コンソーシアムの概要を説明。

計算基礎科学コンソーシアムは、シミュレーションにかかわる基礎科学の研究者が分野を超えて結集し、技術や情報を共有することで基礎科学をさらに大きく発展させようと設立されました。素粒子・原子核、原子分子、ナノ、天体、宇宙、とスケールは違っても、自然界はすべて一続きです。計算という共通な基盤に立った異分野の交流・融合の促進、科学技術の他分野や産業界との連携、さらには将来の日本を背負う若者たちに基礎科学の素晴らしさを伝えることなどを目指して活動していきます。

6月16日、計算基礎科学コンソーシアムの最初のシンポジウムとなる「計算基礎科学シンポジウム：シミュレーションでせまる宇宙の成り立ち～素粒子・原子核・宇宙物理の展望」が東京ス

今回の第一回シンポジウムでは、茅幸二理化学研究所先端計算科学領域長の「素粒子から宇宙にいたる中間としての原子・分子からの生命体までの科学」、寺倉清之北陸先端科学技



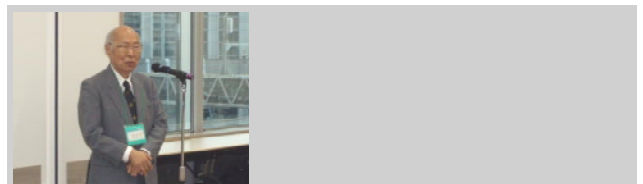
基調講演で熱弁を奮う、(左から)茅幸二、寺倉清之、平尾公彦の各氏。

術大学院大学特別招聘教授の「次世代スパコンプロジェクトと物性科学分野の課題」、そして平尾公彦東京大学副学長の「理論化学の現状と将来の可能性について」という3つの基調講演があり、それぞれの分野における最先端の研究が紹介されました。続くパネルディスカッションでは、「シミュレーションによる素粒子・原子核・宇宙物理の新展開」というテーマで、それぞれの分野の将来像や分野融合の可能性について討議され、会場出席者も含めて、活発な議論が展開されました。



パネルディスカッション。(左から)大塚孝治東京大学教授、大野木哲也京都大学准教授、牧野淳一郎国立天文台教授、東京理科大学鈴木英之准教授。(右)コーディネータの青木慎也筑波大学教授。

計算基礎科学コンソーシアムは今後も、素粒子・原子核・宇宙物理での連携を進めると同時に、基礎科学を中心とするより幅広い分野との交流を深めていきたいと考えています。そのため今回のようなシンポジウムやワークショップの開催、計算基礎科学に関するの広報誌の発行を準備しています。次回は理化学研究所が主催する次世代スーパーコンピュータシンポジウム2008(9月16日～17日)において、パネルディスカッションを開く予定です。



会場にかけつけた有馬朗人科学博物館館長(元文部大臣)「計算基礎科学コンソーシアムの設立は非常によいこと。若い人たちが頑張ってください。」と祝辞を述べられた。